

国語部会 研究の構想（案）

令和3年度～

I 研究主題

言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。

II 主題設定の趣旨

令和3年度から完全実施される学習指導要領では、これまで教育課程全体で育成を目指してきた「生きる力」を、資質・能力としてより具体化した姿で示している。それは「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱で構成されている。そして、これらの資質・能力の育成に当たって、中核的な役割を果たすのが、各教科等の本質に根ざした「見方・考え方」である。国語科における「言葉による見方・考え方」とは、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。つまり、国語の資質・能力を育成するためには、言葉による見方・考え方を働かせて言語活動に取り組み、思考・判断・表現することが重要だということである。また、教科横断的な視点からも、全ての学習の基盤となる言語能力を高めるために国語科が果たす役割は大きい。

平成30年度からの3年間は「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の能力を高めていくための指導はどうあればよいか」という研究主題で研究を進めてきた。その結果、言葉に対する自覚を促す言語活動は、生徒の思考を活性化させ、国語の能力を高めるために有効であることが確かめられた。今後も、生徒一人一人が言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現できるようにするためにはどのような言語活動が効果的か、言葉を意識させる研修を進めていきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

言葉による見方・考え方を働かせるためには、言語活動を充実させることが求められる。そこで、言語活動を通して、言葉による見方・考え方を働かせて思考・判断・表現しながら、国語の資質・能力を高めていくための指導の在り方について、授業実践における生徒の姿を基に研究を進める。

2 研究内容

- (1) 付けたい力を明確にする研究
 - ① 学習指導要領の趣旨と各領域の指導事項やその系統性を理解する。
 - ② 実態を踏まえて付けたい力を明確化・焦点化する。
- (2) 言葉による見方・考え方を働かせる教材研究や単元構想の工夫
 - ① 教材の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ② 取り入れる言語活動の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ③ 生徒が言葉を意識しながら思考・判断・表現できる学習課題を工夫する。
- (3) 「主体的・対話的で深い学び」を実現する言語活動の工夫
 - ① 生徒が学習に見通しをもったり学びを振り返ったりする場面を設定する。
 - ② 一人一人に思考・判断・表現する機会を保障する学習過程や学習形態を工夫する。
 - ③ 課題を解決する場面を設定し、その過程での交流活動を工夫する。
- (4) 身に付けた力を適切に評価するための研究
 - ① 生徒の具体的な姿や表現例を想定した評価規準を作成し、指導と評価の一体化を図る。
 - ② 授業で付けた力を適切に評価する問題を作成する。
 - ③ 学力調査におけるS-P表等を利用した分析から、今後必要な指導を明確化する。
- (5) 情報の扱い方に関する研究
 - ① 情報と情報の関係や情報の整理について研究を進める。

国語部会 令和3年度研究計画（案）

I 研究主題

言葉による見方・考え方を働かせ、思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の資質・能力を育成するための指導はどうあればよいか。

—言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫—

II 主題について

「言葉による見方・考え方」を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。言葉は言語内容と、それを表す言語形式をもっており、言語内容とは「何が書いてあるか（話されているか）」「何を書くか（話すか）」の「何」に、言語形式とは「どのように書いてあるか（話されているか）」「どのように書くか（話すか）」の「どのように」に相当する。国語科では、言語による理解や表現の場面を設定し、言語で表す内容とその内容を表すための形式との関係について着目し、その中で自分自身の「思考・判断・表現」を自覚させ、より適切な理解や表現を目指すように指導する必要がある。例えば、「読む」学習では、「何」が書いてあったか、筆者の主張は「何」かと問うことで終わるのではなく、「どのように」述べられていたか、その書き方は適切だったか、効果的だったかと問うことが重要である。

「言葉による見方・考え方」を働かせるためには、思考・判断・表現することが必要になる言語活動を設定することが欠かせない。なぜなら、言語活動の過程において働くのが「言葉による見方・考え方」だからである。国語科においては、言葉を通じて理解したり表現したりすること、また、用いられている言葉そのものを学習対象としているため、言葉に目を向けることができる言語活動を設定しなければ「言葉による見方・考え方」が働くことは難しい。そこで、今年度の研究主題（副題）を「言葉に対する自覚を高める言語活動の工夫」とした。

言語活動を促すための学習課題が探究的で課題解決型になっていることも重要な条件の一つであると考えられる。少し考えたり読んだりしただけで結論が出てしまうような学習課題では、「言葉による見方・考え方」を働かせる必要がないからである。そのため、言語活動を充実させるためには、学習課題の吟味が重要な要素になる。教材研究の重要性がより一層高まるということでもある。学習課題を解決していく過程で、「言葉による見方・考え方」が働き、指導事項が身に付き、身に付けた力として生徒に蓄積されていくような学習になるように研修を深めていきたい。

新学習指導要領では、〔知識及び技能〕に「情報の扱い方に関する事項」が追加された。急速に情報化が進展する社会において、必要な情報を取り出し、整理し、様々な手段で発信するための力を付けることは、国語科に課せられた重要な使命である。ICT機器の効果的な活用も含めて、早急に取り組まなければならない課題である。また、評価については、今までの5観点から3観点到整理される。新しい観点が目指すところを理解し、指導事項と付けたい力を明確にしながら授業の中で実践し、指導と評価の一体化につなげたい。

III 研究内容とその視点

1 付けたい力を明確にする研究

(1) 学習指導要領の趣旨と各領域の指導事項やその系統性を理解する。

- ① 各領域の指導事項や各学年における指導内容や言語活動例の系統性について具体的に解釈する。
- ② 付けたい力が資質・能力のどれに位置付くか、また、それらの相互関係を明確にする。
- ③ 国語科の学習用語（例：「批評」「根拠」等）について正確に理解させ、指導に活用する。

(2) 実態を踏まえて付けたい力を明確化・焦点化する。

- ① 生徒の身に付けている力や学習状況について実態を把握する。
- ② 小学校や前学年までに身に付けている力の診断的な評価や意識調査を実施する。
- ③ 各調査等の結果から、指導が求められている能力を的確に把握する。

2 言葉による見方・考え方を働かせる教材研究や単元構想の工夫

- (1) 教材の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ① 教材の話題や題材を工夫する。(生徒の実生活と関わりのあるもの、言語への興味・関心を喚起するもの、内容的価値のあるもの等)
 - ② その教材が、付けたい力を指導するのにふさわしいものかどうかを吟味する。
 - ③ 付けたい力を指導するのにふさわしい教材を開発する。
- (2) 取り入れる言語活動の特性を国語科の視点で明らかにする。
 - ① その言語活動を適切に行うにはどのような国語の能力が必要かを吟味する。
 - ② その言語活動が付けたい力を指導するのにふさわしいかどうかを吟味する。
- (3) 生徒が言葉を意識しながら思考・判断・表現できる学習課題を工夫する。
 - ① 言葉への自覚を促す学習課題の設定や提示を工夫する。
 - ② 付けたい力につながり、振り返りの際に学びや変容を自覚できる学習課題の提示や設定の工夫をする。

3 「主体的・対話的で深い学び」を実現する言語活動の工夫

- (1) 生徒が学習に見通しをもったり学びを振り返ったりする場面を設定する。
 - ① 学習の目的や見通しがもてる導入を工夫する。
 - ② 自分の学びや変容について客観的に振り返る終末を工夫する。
 - ③ 生徒が互いのよさや学びを認め合う相互評価を工夫する。
- (2) 一人一人に思考・判断・表現する機会を保障する学習過程や学習形態を工夫する。
 - ① 一人一人が自分の考えをもつ時間を十分に確保する。
 - ② 自分の考えを話したり書いたりする場や機会を増やす。
 - ③ 思考・判断・表現を促す板書、発問、ワークシートやノート指導を工夫する。
- (3) 課題解決の過程における交流活動を工夫する。
 - ① 何を目指し、何について議論するのか、ねらいの達成に向けた効果的な交流活動を設定する。
 - ② ねらいに応じた適切な学習形態を工夫する。

4 身に付けた力を適切に評価するための研究

- (1) 生徒の具体的な姿や表現例を想定した評価規準を作成し、指導と評価の一体化を図る。
 - ① 活動の様子ではなく、付けようとした力を評価する。
 - ② 評価内容・評価の判断基準・評価方法・評価場面等を想定しておく。
- (2) 授業で付けた力を適切に評価する問題を作成する。
 - ① 3つの観点を適切に評価できるように、授業に沿った定期考査問題等を工夫する。
 - ② 「努力を要する状況」の生徒に対して支援する。
 - ③ 「十分満足できる状況」の生徒を伸ばす指導を工夫する。
- (3) 学力調査におけるS-P表等を利用した分析から、今後必要な指導を明確化する。

5 情報の扱い方に関する研究

- (1) 情報と情報の関係や情報の整理について研究を進める。
 - ① 話や文章に含まれている情報と情報の関係を捉えて理解し、表現できるように指導を工夫する。
 - ② 情報を活用する際の整理の仕方やそのための具体的な手段を工夫する。

IV 研究方法

- 1 県、郡市や学校単位で指導案や指導資料等のデータを作成し、収集、整理、提供の円滑化を図る。
- 2 郡市や学校単位で、指導計画、授業や実践事例等について協議、情報交換し、研究を進める。
- 3 全国学力・学習状況調査や中教研究学力調査を活用し、研究の推進及び指導の改善に努める。
- 4 実践的に研究に取り組み、成果と課題を明確にすることで、PDCAサイクルを機能させ、カリキュラム・マネジメントの充実を図る。

